（第3種郵便物認可）

幸区・夢見ケ崎の絵

環。小倉商栄会（幸区小倉）が協力した。

ブサを描いたシャッターアートは、酒販店「リカー&フーズうちだ」、生花店「花伊正」の倉庫の二カ所。絵本の作画を担当したあずさんが手がけた。

はたらくらすの石渡裕美代表理事は「新型コロナウイルスの影響でイベントができない中、協力した酒販店店主で、小倉商栄会会長の内田博正さん（六〇）は、店のキャラクターにしているアザラシ「タマちゃん」との共演を依頼。内田さんが自分でシャッターに描いたタマちゃんに、雲に乗ったブサが向かい合う構図になっている。

内田さんは「商店街の街灯をLED（発光ダイオード）に切だ。

この絵本は二〇一九年に完成。主人公ブサを案内役にタイムスリップする物語で、公園のある加瀬山からの風景をたどりながら、地域の移り変わりを伝えている。はたらくらすによると、昨年十二月には市立小倉小学校など、公園近くの三校にミニ絵本を配布したという。

コロナ

県は二十六日、自宅で療養している新型コロナウイルス感染者のうち症状悪化のリスクが高い人を、看護師らが見守る新たな仕組みをつくることで、県内十八の郡市医師会と合意したと発表した。各地の訪問看護態勢が整った拠点からスタートする。

対象は、無料通信アプリ「LINE」や電話で毎日行う健康観察に返事があるものの、基礎疾患がある人や、血中酸素飽和度が低い人。看護師や訪問看護ステーション事務員が電話で安否を確認し、看護師が必要と判断すれば訪問する。

「発熱が三日以上続いている」「食事を取れていない」「呼吸困難がある」などの自宅療養者については、各医師会が事前に選んだ医師らに訪問診療やオン

期間の延長など

る。

これまでは、健

返事がない人に所

所職員が訪問して

返事はあるものの

クがある人には

がなかった。

県は昨年三月、

自宅療養者を見守

を目指す方針を掲

れた理由につい

明・県医療危機対

は「初期の頃は

知の病でハード

のだった」と語っ

（

入居型高齢者・障害者施設の職員

定期PCR検査 初回は6万100人

県は二十五日、入居型の高齢者施設や障害者施設の職員への新型コロナウイルスの定期的なPCR検査について、二十二日から始めた初回分は千三百九十施設の六万百人が検査を受けたと明らかにした。当初見積もった三千六百施設、十万八千人の半数程度にとどまった。今後、改めて検査を受けるよう呼び掛ける。

施設職員への定期検査は、感染者の発生に早期に

気付いてクラス

者集団）になる

る目的。三月二

目、十九日から

査をする。検査

検査を受けな

い理由について

に自前で検査し

が多いこと」「

が見つかった場

検討中の施設が

と分析。感染者

に臨時で介護ス

遣する県の制度

し、多くの施設

けるよう促して

（

秋山裕姫乃さん

コロナ下の大学生日記 2

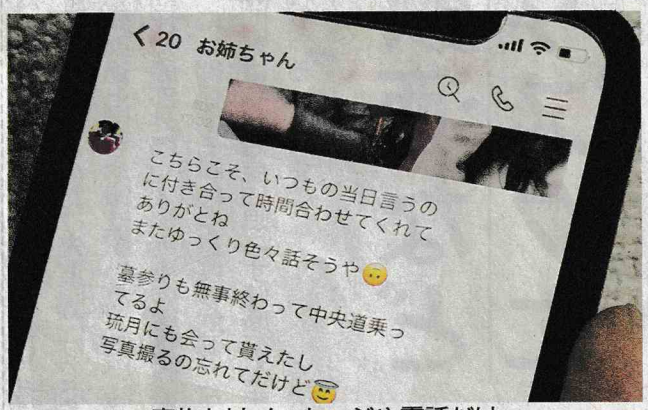
30分だけ 家族と再会

「明日もしかしたら裕姫乃に会いに行くかもしれません」

昨年末、バイトを終え終電で川崎市内の下宿先に帰っていると、姉からLINEが届いていた。山梨の両親と姉の三人が墓参りのために車で東京にやってくるらしい。通り道にある私のアパートに立ち寄っていいかと連絡が来ていた。

新型コロナウイルスが猛威を振るい、私は三月から実家に帰ることができなかった。現在もメッセージと電話だけでのやりとりが続いている。近況報告の家族写真に、自分がいないことが寂しい。

Go To トラベルを利用し帰省や旅行をする友人もいたが、私は下宿先に留まり飲食店のアルバイトをしていた。私の母は医療従事者である。仕事で不特定多数と接触している自分が帰省するのははばかられた。正月に帰るのもあきらめていた。しかし、せっかく家族が東京に来るのなら会いたい。少しだけでいいから、家族の顔が見たかった。



家族とはメッセージや電話だけのやりとりが続く（本人提供）

姉から連絡が来た日、東京ではコロナ感染者数が七百人を超えた。「会いたい、会おう」と返信したい気持ちをこらえ、「こんな状況だから会うか会わないかの判断はそちらに任せるよ」と返した。私にできる精いっぱいの「予防」だった。

翌日、家族と会えたのはたったの三十分だった。寒空の下、アパート近くの駐車場で、距離を保ちながらマスクをしたままの会話。本当にあっという間だったが、久しぶりに見る家族の顔にとても安心した。

「あと一年お父さんも頑張るから、あんたも頑張りなさいよ」

帰り際、父は私に仕送りを渡しながら言ってくれた。無愛想な父があんなに優しい顔をしたのはいつぶりだろうか。久しぶりに触れた家族は、とても温かかった。

（専修大文学部三年・秋山裕姫乃）